World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第76回

# タイからミャンマーへ 国境について考える

須賀（すが） 努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

近年、タイには年に１度は必ず行き、国内旅行を楽しんできた。そのなかでタイからミャンマーへ陸路で越えられる、メーソートの街（ミャンマー側ミャワディ）については、既にご報告済みである。だが、タイ-ミャンマー国境は相当に長く、今回はタイ側の３つの街からミャンマーを眺めてみた。

## メーホーンソン 国境を越えたが

メーホーンソンは、タイの北西部でバンコックからも非常に遠く感じられる街である。フライトを利用すれば１時間ちょっとで行けるのだが、もし陸路を使うとなると、チェンマイからバスで７時間ほどかかる場所、といえばその遠さが分かるかもしれない。

この街は特にこれといった産業もなく、静かな落ち着いたところである。周辺の少数民族の村などを訪れる観光が、欧米人などに人気だという。筆者は相変わらず茶畑がある所を旅しており、今回もメーホーンソン郊外に茶畑があったという目撃情報をもとに、街から45kmほど離れたミャンマー国境のメイオ村に向かった。そこにはタイ北部に何か所もある、いわゆる国民党残党（国共内戦でビルマに逃れ、その後タイに渡った中国国民党の兵士と家族）の村があり、国民党との繋がりから、1990年頃より台湾の支援で茶業も始まったという。

この小さな村から車で５分も行くと、ミャンマーとの国境である。残念ながら外国人が通れる国境はない。というか、そこはかなりの山で、ミャンマー政府も管理できていない土地が存在しているのだ。そこには、政府から迫害された少数民族、カレン族やバオ族の人々が逃げ込んでおり、ひっそりと身を潜めている。このような閉ざされた場所は、日本では想像できないが、タイ-ミャンマー国境には何か所もあると聞き、また知らない世界に一歩踏み入れた思いだ。

## サンクラブリー 国境線なき国境

タイ中部のカンチャナブリといえば、映画『戦場にかける橋』で有名な泰緬鉄道の起点。その過酷な労働により、多くの労働者や捕虜が亡くなった場所でもある。今ではその橋も観光地となり、タイ-ミャンマー間を走る線路は既にその多くが廃止されているが、一部が復活していてバンコックから列車で旅することもできる。

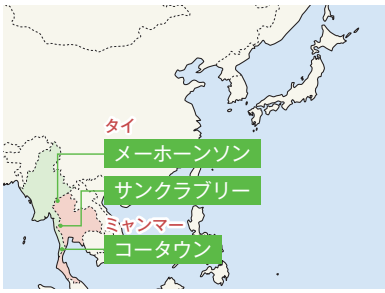
そのカンチャナブリから車で３時間あまり、ミャンマー国境の街がサンクラブリー。ここまで来るとタイ人よりは、モン族などミャンマーにもいる諸民族が混ざり合って生活しているようである。川向うに住むモン族が自力で作り上げた橋は実に見事で、一見の価値がある。

サンクラブリーの街から20kmほど走ると、ミャンマーとの国境、通称スリーパゴダパスに着く。今回は敢えて庶民が使うソンテウ（小型トラックの荷台を改造した旅客用乗り

写真１　サンクラブリー
ここが国境？

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。




物）に乗って行ってみたのだが、国境に着いてもスリーパゴダパスに向かうのは筆者一人だけで、残りは全員どこかへ行ってしまった。イミグレーションで聞いてみても、『外国人はここを通行できない』と言われてしまい、先に進めなかった。

帰りのソンテウまで時間があったので、先ほど同乗者が歩いて行った方に行ってみると、その細い道には小さな縫製工場などが立ち並び、ミャンマー人が働いていた。この付近の雰囲気はもう完全にミャンマーの路地だった。その先に小川が流れていたので、何気なく渡ってみると、幼い子どもが何かを訴えかけていたが、言葉が分からない。

そこでハッとした。周囲を見るとミャンマービールの看板などが見える。そうか、ここから先はミャンマーなのだ。いや既にミャンマーの地を踏んでいるかもしれないと思い、慌てて引き返した。この周辺の住民と労働者は誰も、正規の国境越えなどせず、自由に両国を行き来していたのだ。こういう環境がない日本人にはある意味で信じられない光景であったが、彼らには通行証のようなものが発行されているのだろう。

## コータウン 自己責任型国境

最後にタイ南部、温泉で有名なラノーンにも行ってみた。ここからボートに乗れば、ミャンマー最南端のコータウンに行けると聞いたので、港まで行ってみた。すると、ボートの客引きがものすごい勢いで押し寄せてきて、客集めに奔走していた。客が集まったボートから出発するので、客側も慎重に選んでいる。外国人である筆者だけが、タイのイミグレーションで手続きをしているようだ。

写真２　コータウン
港に着いてもイミグレなし

途中でボートのチェックポイントがあり、船頭が身分証を片手に船を降りていく。彼はずっと命の次に大切なパスポートを握りしめたままで、万が一落としでもしたらどうなるのかと気が気ではなかった。40分ほどで対岸に着く。

コータウンの港にボートが着くと、乗客は我先に陸に上がり、そのまま街の雑踏に消えていく。入国審査はしなくていいのか、イミグレーションオフィスはどこにあるのか。表示はどこにもなく、係員は一人もいない。少し離れた場所の建物をみつけて自ら出頭した。これまで外国人は国境では管理される存在だと思い込んでいたが、全く異質な対応に度肝を抜かれる。

そして、そのオフィスでも『おお来たか』といった感じでまるで緊張感はなく、日本人はビザ免除のため、特に費用もかからない。ただ『いつ帰るのか』と聞かれたので、『今日』と答えると、パスポートに一度に２つのスタンプ（出入国）を押され、『帰る時は来なくてよい』と言われてしまう。

これまでさまざまな国境を通過してきたが、こんな扱いは初めてだった。これなら、もし手引する人がいれば、密入国もすぐにできてしまう。俗にいう（北朝鮮人やウイグル人が通った）脱北ルートなどにも使われるわけだ、と初めて納得した。同時に、両国とも国境付近の路上検問がなぜ厳しいのかにも合点がいった旅だった。